



京都・東九条 CAN フォーラム ニュースレター

2009年6月10日

No.001

「多文化共生が息づくまち」をめざして

京都・東九条 CAN フォーラム 代表 朴 実

この号の内容

- 1 「多文化共生が息づくまち」をめざして
- 2 設立総会が開かれる
- 3 記念シンポジウム「多文化共生のまちづくり」
- 4 連続学習会 7月8月の予定
- 5 楽しいイベントを

総会で選出された役員は以下の通りです。

役員名簿

代表 朴 実
副代表 広瀬 光太郎
事務局長 金 周萬
会計 金 光敏
会計監査 井上 勇一
事務局 小林 栄一
宋 基和
徐 正吉 他

任期2009年4月1日
～2010年3月31日

東九条は京都市の中で最も多く在日外国人が居住する地域です。戦前から戦後にかけて、この地域では民族差別や貧困にあえぐさまざまな境遇の人々が肩を寄せ合い生きてきました。1960年代以後、廃品回収に従事する人々の集落は度重なる大火災により、着の身着のままに焼け出され、人が焼け死に、深刻な社会問題として京都市民が認識するに至り、当時の京都市長も現地を視察し、問題の深刻さに「東九条対策」を約束しました。

あれから約40年の歳月を経て人口は減少し(4ヶ町約 1/5, 山王学区約 1/3, 陶化学区約 1/2)、まちに活気が失われつつあります。この間、住民運動と京都市の協力により一部住環境等で一定の成果を上げたものの、それは東九条の抱える問題の一部にしかなりません。これまで行政主導で東九条は狭い範囲で限定されてきました(山王学区 4カ町、陶化学区東松ノ木町など)が、東九条を捉える場合もう少し広い視点が必要で、特定の地域に限定する必要はありません。

また、東九条が抱えている問題としての民族差別や部落差別、障がい者差別などを無くすための対策は著しく立ち遅れているのがその現状だと思います。最近ではアジアからのニューカマーや、新たな貧困層の流入などの新しい社会現象が見られます。今こそ東九条を「多文化共生が息づくまち」として再生する必要があります。私たちはもう一度、東九条の歴史や現状から根本的に問題を見直し、住民・市民運動と行政が共に手を携え、未来に希望の持てる「多文化共生のまちづくり！」をめざし、ここに「京都・東九条 CAN(Community Action Network)フォーラム」を結成します。

設立総会がひらかれる

2009年5月10日、故郷の家・京都の文化ホールにおいて京都・東九条 CAN フォーラムの設立総会およびシンポジウムが開催され、約90名が参加した。

東九条 CAN フォーラムは昨年2月9日の大雪の日準備会を発足させ、それ以来1年4ヶ月の活動を経てきた。朴実代表より、「わたしが東九条に生まれ育って65年たちますが、近年まちは人口が減って廃れてきた印象をもちます。一方では東九条マダンやのぞみの園、故郷の家、エルファなどさまざまな活動団体があるにもかかわらず連携が少ないんです。皆さんの協力を得て、再び活気のある賑わいのある、多文化共生のまちを取り戻したいと思います」とあいさつが述べられた。

公明党からは角替議員・大道議員、日本共産党からは井上議員、民主党からは山本議員から設立にあたって祝いの言葉が述べられた。また、門川大作京都市長からの電報も紹介された。

改めて、代表の朴実さんより趣旨文、準備会事務局よりから会則・活動方針案が提案され、拍手をもって承認された。また、今年度の役員体制案が準備会事務局より提案され、同じく拍手をもって承認された。その後、障害者の社会参加の位置づけなどについて、質疑応答がおこなわれ、今後新しいアイデア、新しい発想を加えていく必要性が確認された。

記念シンポジウム「多文化共生のまちづくり」

在日の若い人や日本人に伝えたいことはたくさんある。多様な可能性を持つこの地区から情報を伝えていくため共に頑張りたい



京都・東九条 CAN フォーラム 代表
朴 実

仕組みづくりの中で、地域にあるいろんな強み、特徴を発見して編集、デザインしていく創造性



コリアン NGO センター共同代表
宋 悟

「多文化共生のまちづくり」をテーマに、東九条マダンの代表であり京都・東九条 CAN フォーラム代表として改めて承認された朴実さん、そしてコリア NGO センター・代表理事の宋悟さん、立命館大学政策科学部准教授吉田友彦さんの3人をパネラーに記念シンポジウムが開催された。

● 自分たちがもっている能力を活かす(朴実さん)

朴実さんからは、東九条の歴史と課題、今後の可能性について話がなされた。東九条はかつて九条家の陶化御殿があり、その周辺はほとんど畑だった。1920年代に東山トンネルの複々線工事があり、1930年代に九条通が拡幅、一部高架道路、鴨川の堤防工事などに従事するために当時、植民地だった朝鮮半島から朝鮮人が労働力として東九条にも多く暮らすようになったことや、戦後、闇市、闇米などにおける活発な経済活動、不良住宅などの問題などの歴史が語られた。近年の問題として東九条の人口が少なくなり、空き地が多くなってしまったこと、焼肉屋が物品屋になり、大型の飲食店が閉店するなど、どんどんまちが廃れていることが語られた。その一方では新たなまちの動きも確認された。エルファによるデイサービスなどの取り組み、故郷の家の設立、東九条マダンが1日4000人動員していることなどが紹介された。住民・市民が知恵を出し合うことにより、日常的な町の活気を取り戻せるのではないかと語った。

これからの取り組みとして、東九条に全国からくる見学者たちをうけいれる公的な施設の必要性が言及された。東九条は世間にはトンクジョウとよばれ、被差別的にとらえられる。しかし、東九条には多様な人たち住民・市民が知恵を出し合うことにより、日常的な町の活気を取り戻せるのではないかと語った。

東九条は多くの外国人が暮らしており、さまざまな可能性をもった地域でもある。これをプラス思考として、東九条の住民だけでなく、京都全体の問題として学者の方やお金を出せる人はお金を、技術をもっている人は技術を、様々な人たちが知恵をだしあって、行政の人にもはいつてもらって、東九条に多文化共生コミュニティセンター、いつでも誰でもきてもらって、自分たちがもっている能力を活かすことのできるまちづくりが宣言された。

● 地域における多文化共生の仕組みづくり(宋悟さん)

宋悟さんからは、コリア NGO センターの取り組み、および大阪市生野区におけるコリアタウンの事例について報告がなされた。コリア NGO センターにおける4つの取り組み、①公立学校における「民族学校・クラブ」の制度保障、②生野コリアタウン人権研修プログラム、③多文化共生社会の実現にむけた政策提言活動、④ワンコリアフェスティバルへの取り組みが紹介された。

そして、多文化共生を考えるにあたって、誰による誰のための、何のための多文化共生なのか、“日本の大企業の労働力を確保するための多文化共生”なのか、“民族的マイノリティ当事者のための自由と安心と自信をもって暮らせるようにしようという多文化共生”なのか、人権尊重と歴史的な文脈の視点をもった多文化共生の重要さが語られた。

次に多文化共生のための必要条件として外国人・民族マイノリティの人権を保障する基本法といった「法制度」、民族差別など緊急的な課題と国際理解を広めるといった課題に対応していく「2つの現場」、そして地域社会の中の多様性を認めていくような「空気」が必要であること。多文化共生をめざすときに、全部のことを一気ににはできないので、どの部分を京都・東九条 CAN が最初にどの部分から手をつけるのかが重要だと指摘した。

重要なポイントとして、仕組みづくりの中で、地域にあるいろんな強み、特徴を発見して編集、デザインしていく創造性が問われている。反差別、人権といった要求スタイルも重要だが、これに加えてさらに新しいもの、制度、雰囲気をつくっていく価値創造型のまちづくりも必要となってきていることが強調された。

多文化共生のまちづくりにむけての仕組みづくりのための、「人権研修プログラム」や「生野区地域福祉アクションプラン」、「生野コリアタウン倶楽部」など具体的な取り組みも細やかに紹介された。

● 若者が住み続けることのできるまちを(吉田友彦さん)

立命館大学の吉田友彦さんからは、東京・大久保と大阪・旧猪飼野からみる東九条地区の将来について提案がなされた。まず、新宿駅の北側にある大久保は現在韓流ブームで活気を呈しているが、どのような特徴があるのかについての調査結果が紹介された。職安通の商店振興組合に加盟している商店と韓国系商店の所有者や取得年度などを調べ、比較してみたところ、韓国系商店は飲食業に特化している。そして、民間の分譲マンションを賃貸化して店ができる傾向があることがわかったとのことであった。この前いった店が次いったときにないなど流動性は高いが常に多くの店が存在している。最初、ある韓国食材のスーパーがキムチなどを売っていたが、このスーパーが起爆剤になって多くの店が広がっていったことが紹介された。

次に、旧猪飼野地区の店舗の変容について紹介された。生野区御幸森商店街の店舗の商店主や形態がどう変化したのか、1996年時点と2006年時点と比較してみたところ、廃業が日本人に多いこと、借家商店ではなく持ち家商店が廃業したこと、廃業後はそのまま放置されているなど、つまり日本人がでていってしまっている。コリアンと日本人とどういっしょにやっていくのかは東九条でも求められているとの指摘がなされた。

では、京都・東九条はどうか。1968年と2005年の人口ピラミッドとの比較から、数多くの人が出た、特に1968年の時点で15歳から19歳までの人たちが特に減っているが改めて確認された。職業の状況や経済の状況もあるが、すみ続けられるまちであったのかということが問われている。4ヶ町の場合、公営住宅の存在が大きく、民間住宅市場を排除していないか。もちろん、高齢者への支援も重要だが、若い人が住み続けられる町について考えていかないといけなんじゃないか、そして日本人も来て楽しいイベント・まちづくりも重要との指摘があった。

吉田さんからの提案として、東九条の将来を考えると、東九条のまちづくりの歴史を学ぶ現場としての学校的な機能が重要だろう。地域としてのひろがりのなかで、まちづくりを学ぶスポットがたくさんあり、それを面的な広がりのなかでつないでいくことが提案された。場所にもものごっこしていなかったとしても、その記憶だけで歩くだけでもいい。九条ねぎとかいろんな地域資源もある。外国人観光客、日本人も楽しめるものであてほしい。そして最初はイベント、人の交流でもいいが、だんだん地域にすめる人が増えていくことが重要。マンションを建設して増やすんじゃなくて、地域のイメージをあげながら自然に人が増えていくという方向が提案された。

発題後も活発な意見交換、提案がなされ、ときおり会場から拍手がおこるなど活気のあるシンポジウムとなった。



立命館大学政策科学科准教授
吉田友彦

マンションを建設して増やすんじゃなくて、地域のイメージをあげながら自然に人が増えていくという方向

応援してください 参加してください 会員を募集中です

- 個人会員 1口 1,000円
一口1,000円で何口でも結構です
- 賛助会員 いくらでも結構です
活動に使わせていただきます
- 団体会員 1口 5,000円
一口5,000円で何口でも結構です
- 特別会員 会費負担なし
どんどん活動に参加してください

多くの活動資金を必要とします、ぜひ、2口、3口とご協力ください。

振り込口座：ゆうちょ銀行 00910-7-216594 口座名義：キョウト・ヒガシクジョウキャンフォーラム



事務局からのお知らせ

- 総会当日会計

資料代	36,500 円
当日一般カンパ	6,800 円
洛南幼稚園	5,000 円
自治労京都市職員労働組合	10,000 円
会員希望者	36 名

- CAN フォーラム MINI コンサート 予告

ライブ&トーク“EAST NINE”??

イーストナインとは東九条出身のヒップホップグループ。1980年代、ニューヨークのゲットーに育った黒人のティーンエイジャーたちによって作られた音楽やダンスなどのサブカルチャーのスタイルがヒップホップの源流。東九の元悪ガキの自己表現を聞いてみませんか。東九条は、日本でのサブカルチャーを発信できる可能性を持った場所なんですよ…。まずは、ご体験あれ！

日時:2009年8月8日(土) 17:00~18:00

場所:未定

京都・東九条 CAN フォーラム

〒601-8013 京都市南区東九条南河原町3

075-204-7900

<http://higashikujoforum.jimdo.com/>

E-mail/higashikujoforum@gmail.com

毎回参加資料代として 500 円をご協力ください。

- CAN フォーラム連続学習会その1



立命館大学産業社会学部教授
小澤 亘
「多文化共生社会」の実現性の可能性、とくに、ボランティアセクターの役割に注目しながら研究している。

テーマ「多文化共生をめざして」

日時:2009年7月4日(土) 18:30~20:30

場所:エルファセンター

京都市南区東九条北松ノ木町7

- CAN フォーラム連続学習会その2



立命館大学産業社会学部教授
原尻 英樹
日米のコリアンを中心としたフィールドデータを通じ、ポスト近代における中国朝鮮族のネットワークコミュニティを研究

テーマ「他国にみる多民族多文化コミュニティ」

日時:2009年8月8日(土) 18:30~20:30

場所:エルファセンター

京都市南区東九条北松ノ木町7

連続学習会は、「多文化共生」「部落問題」「まちづくり」をテーマにして行ってゆきます。